

# 昔話「桃太郎」の原像

はじめに

昔話の桃太郎の成立については、早く滝沢馬琴が『燕石雜誌』で論じ、柳田国男が『桃太郎の誕生』で各地に残る昔話収集の重要さを説き、志田義秀が『日本の伝説と童話』で再論している。また近くは膨大な資料・論考を収集整理した滑川道夫著『桃太郎像の変容』がある。しかし、遠く『風土記』まで遡れる「うらしま」や『宇治拾遺物語』に本然とした形で収録されている「こぶとりじいさん」は別格としても、「一寸法師」等多くの昔話が中世、室町期にその淵源を求められるのに対し、この桃太郎はそれらしい資料の片鱗さえなく、馬琴等の探索にかかわらず、確とした成立の根拠も見出されていない。もちろん、私もその上に付け加える資料があるわけではないが、本稿ではその成立とその昔話としての性格についての私見を述べてみたい。

桃太郎を素材とした文学は黄表紙・合巻等種々多くあるが、その最も古い形は享保の頃に求められる。「評釈江戸文学叢書」の『洒落本草雙紙集』の解題に、豆本の「桃太郎」があつたとしている。近藤清春画、享保八年正月刊、江戸大伝馬町の丸屋九左衛門版というが、これは今日見ることができない。この期にはもう一つ、子供向きの江戸版の赤本がある。藤田秀素画の「桃太郎」で、題簽には「むかし／＼の桃太郎」と

昔話「桃太郎」の原像



(一才)



(題簽)

白  
方  
勝



(二オ)



(一ウ)

題し、「多奥村」とある。「奥村」は奥村政信、俗称源六、享保頃の絵師で書肆を営む(浮世絵類考)。「多」は題簽の絵の絵師であるとともに、奥村版を意味していよう。表紙見返しに「文化十年癸酉正月うらをうたせ表装をつくろひて秘蔵す 桃太郎之赤本古雅可愛玩 式亭珍蔵」と式亭三馬の識語がある。この三馬の旧蔵本も伝わらないが、「稀書複製会本」に入っている。これを一応桃太郎話の古型と考える(略称、赤本)。この外に江戸鱗形屋版の赤本と思われる「桃太郎昔語」(東京都立中央図書館加賀文庫蔵・近世子どもの絵本集)所収。略称、鱗形)があるが、絵は「赤本」に倣った点が見受けられ、内容的に見ても「鱗形」を後とするのが妥当である。桃太郎話を今日の形に定着させたのは明治二七年刊の巖谷小波『日本昔噺』(略称、昔噺。日本児童文学大系1による)と言われるが、児童文学らしい修飾を施した叙述になっている。明治期には早くから唱歌・教科書類で取り上げられているが、それらについては滑川氏の大著に資料をあげて詳しく考察されている。このうち唱歌では三十三年六月刊『幼年唱歌』(講談社文庫『日本の唱歌』に所収)の「桃から生まれた桃太郎」で始まる「モモタロウ」、続いて四十四年五月刊『尋常小学唱歌』(『続日本歌謡集成』第五巻に所収)の「桃太郎さん」が今日にまで流通している。また地方ら伝えられた桃太郎話としては岩波文庫『桃太郎・舌きり雀・花さか爺』日本の昔ばなし(II)―所載の青森県に伝えられた二話がある(略称、三戸話・西津軽話)。さらに多くの伝説や研究があるが、煩瑣にもなるので、今は「赤本」を古態と見て、先ず「赤本」の絵を掲げ、その説明の文句を翻字し、以上あげた資料と比較しながら、考察する。

一 桃から生まれた桃太郎

赤本は話の筋も簡略で、細部は省略されているので、子供に親が語る

場合は、絵を見ながらそれを補って語ったのであろう。

初丁表 むかしくぢ、はやまへしはかりに、ば、は川へせんたくに、

うつくしきも、ながれ来しをとりにかへる。

今日の語り出しと同じであるが、「鱗形」は「昔々あったとき、爺は山へ草刈りに」となっており、それを聞く子供が「桃太郎はおもしろい」「そのあとで兎の手柄を聞きたい」「黙って聞け」と言っている場面を描いている。「赤本」では大きな桃とは指定されていないが、婆のせりふには「やれよいも、かな」とある。絵の桃は「赤本」「鱗形」ともにさして大きくない。「も一つながれてこい」とは欲深いようであるが、「鱗形」では「爺にしんじよ」と付け加え、『燕石雜志』には「老婆桃の実二つを得て携えかへりて」とある。「三戸話」によると「婆が洗濯していると、上の方から桃がぶんぶんぶらと流れて来たそうです。婆が拾って喰って見たら、なにもかもうまかつたそうです。」とあり、爺にも持って帰って食わそうと思って「うまえ桃こあこっちゃ来い、にがい桃こああつちや行け」というと、大きなうまい桃が、婆の方に流れて来たそうです」となっている。「昔噺」でも、遠い水は苦い、近い水は甘いと言って桃を引き寄せる。少し「桃」についての設定は異なるが、「も一つながれてこい」の背景にはこうした話があったと読んでよい。「ぢ、におませう(やろうの意)」とある、ぢ、への思いやりも「三戸話」に同じで、爺のせりふにも「あ、くたびれた、はやくかへつてば、がかほでも見よう」とあり、仲のよい老夫婦であると知れる。このせりふは今日の昔話では語られないところである。

初丁裏と二丁表は見開きで、桃太郎誕生の場面で、取上婆が桃太郎に産湯を使わせているところが描いてあり、「も、太郎たんしやう、ふぎや、ほぎや」とある。しかし、桃太郎は桃から生まれたのではない。「ぢ、とば、も、をふくし、たちまちわかやぎて一子をもうけ、も、太

郎となづく」とあって、若い夫婦の姿が描いてある。「鱗形」にはせりふはないが、絵は若返った夫婦となっている。これを若返り型、桃から生まれるのを果生型などという呼び方もある。先の「昔噺」も岩波文庫の二話等も桃からの果生型であって、若返りによる誕生にはなっていない。『燕石雜志』には割注で、先の桃の実持ち帰りの後「夫婦これを食べ、忽ちわかやぎつ。かくて一夜に孕めることありて男子を生めり。因りて桃太郎と名づくといへり。」と若返り型のあったことを紹介している。滑川氏は近世は多く若返り型で、近代は果生型であるとしている。

「桃太郎」の昔話としての性格を考察する上で、まず問題になるのがこの誕生である。この点についての説は出尽くした感があるが、その中から適宜私見に添って敷衍してみよう。果生型は一般的に見れば、話の型としては珍しいものではない。かぐや姫の竹中生誕、鶯姫の鶯の卵生誕等がすぐ思い浮かぶ。島津久基著『羅生門の鬼』では、中国・韓国・東南アジア等の話を紹介されている。『燕石雜志』では「桃実の中より児の生れし由は所見なし」としながらも「竹節の中より児の生れたる事は、和漢にその故事あり」として『述異記』等おおくの例を紹介している。それを桃としたのは「桃は仙木にして、百鬼精物を殺すの功あればなり」としている。『嬉遊笑覧』でも「桃は五木の精にして仙木なり、故に邪気を圧伏し百鬼を制するよし漢土の諸書載」（巻九言語）と同意見である。例としては『古事記』のイザナギ・イザナミ神話、中国の西王母伝説を上げておけばよいであろう。それにもう一つ加えれば、桃は生殖器そのものを内包している。形が少しいびつなために、尻の座りの悪さを意味している桃尻という言葉もあるように、桃は尻の形に似ており、実を割れば女性性器そのものである。中野栄三著『江戸秘語事典』にも、桃花は経行、桃源は女陰名とある。桃から子が誕生しても何ら不自然ではない。「桃から生まれた」とは、まさに子の誕生を桃に転化したもの

にほかならない。桃が立派であれば、立派な子が生まれる。「鱗形」では、取上婆が「この子は強い子じゃ。おれが手をはねのけもつす」とある。その願いをこめた話の型なのである。異類・異物から生まれた子はすべて超人的な成長をして、例外はない。桃に「仙」があり、邪気を払うのであれば、桃太郎は鬼を退治することのできる青年として成長する。否、逆に鬼を退治するという前提があつて、その英雄は、桃から生まれたとする趣向が出てきたとすべきであろうか。

しかし、桃から子が生まれるのは非現実的であるというなら、「赤本」に見たように、これを利用して若返つたとすればよい。桃はすべての命の根源である。西王母伝説そのものがこの若返り型である。桃の「仙」の立場からはこの型の方が正統であり、今日から見ても合理的に感じられる。しかし若返りもまた同じく非現実的というなら、「桃から生まれた」方がより昔話の型に添っているとと言える。どちらの型が古いかは別としても、果生型が桃太郎話の主流になつたのは、昔話としての型を人々が好んだためであろう。

ただ、この桃太郎の誕生譚には申し子譚がない。「赤本」を始め爺と婆には何の指定もないが、もともと子はなかつたという前提になつている。子のない夫婦は神仏に申し子をするのが「一寸法師」「浄瑠璃姫物語」等室町期の草子や語り物の型である。上方版「桃太郎」（『絵本あつめ草』所収・国会図書館蔵）は改変が甚だしい作とはいへ「ただ一人の娘ありて男子なき事を嘆き、御香之宮に詣で」明神より桃を賜ることになつており、「昔噺」でも「其方衆二人が此年頃、子供が無い吐嘆いて居るのを、神様も不便に思召し、則ち私を授ける程に」と神様からの一方的な申し子であると桃太郎に言わせているのは、これも小波の付加したせりふであるが、そこには本来この話も申し子譚であるべきとの意識があつたからであろう。申し子譚のない桃太郎話は、中世の昔話の典



(二ウ)



(三オ)

型的性格を欠いていることになる。

## 二 気はやさしくて力持ち

赤本の二丁裏は桃太郎四歳の時で、なんとおじい、たくあんつけのいしでもかたて、かふ差し上げられふ、やい」と大きな石を片手で持ち上げて描いている絵がある。見ている大人二人も「つよいがきだ」「これはならぬぞ、四つ子の大ききだ」と言っている。「三戸話」にも「だんく育つて力持ちになったそうです」とある。「気はやさしくて」はさて置き、ここで桃太郎の少年時代の力持ちについて見ておこう。「赤本」ではたくあん石を持ち上げ、「三戸話」でも「力持ち」としている。この点を省略して語る話もあるが、異類・異物から生まれた子は、異常な成長をし、異常な能力を発揮する。桃太郎話も小さ子譚に属する性格を持ち、桃太郎はいわば少年英雄なのである。ヤマトオグナ（倭建命）から始まり、坂田金時、牛若丸、室町の御伽草子の『小男の草子』、『一寸法師』にまでつながっていく系譜である。柳田国男の『田螺の長者』には小泉小太郎を紹介している。その系譜に立てば、桃太郎の少年英雄的な性格は、鬼征伐で発揮されるものであるし、また、それを前提にした性格であろう。ただこうした少年英雄は「気はやさしくて」とばかりは言えない。倭建命のように荒々しい気性の持ち主もいるし、一寸法師のように悪知恵を働かせるものもいる。「気はやさしくて」とは、子供に与える童話にふさわしい性格として付与されたものであろう。

## 三 日本一の黍団子

「赤本」の三丁表は桃太郎が鬼征伐を申し出る場面で、立派な青年になった太郎が「だんごもつておにがしまへまいりたい」と申し出るのに対し、父が「それはよしにしや、だんごがすきならこしらへてやり申そ



(四才)



(三ウ)

ふ」と有め、母が「太郎かはじめてののぞみで御ざんす、やらしやいませ」ととりなしている。そして、左上に「藤田秀素筆」とある。

三丁裏は黍団子をこしらえる場面である。父は「日本一のきびだんご、道中のべんとうにたくさんできるが、ひとりたびが心もとない」と言い、桃太郎が「ちよつと百まるめた」と言うのに対し、母は「よくできました」と褒めている。父が心配をし、母が気丈夫であるのは、世間一般の場合とは逆である。父の方が現実を知っているということであろうか。

桃太郎が持参する黍団子の性格も吟味する必要がある。「赤本」では「日本一のきびだんご」と言い、猿も「日本一のきびだんご」と言っている。この黍団子を道中の弁当として百まるめて重箱に入れている。これは道中弁当であって、今日岡山で売り出している菓子子の吉備団子ではない。この黍団子を持参するのは、桃太郎だけでなく、広島県においては雀が黍団子を持って鬼退治に出かける話を柳田国男が紹介している（「昔話覚書」猿と蟹）。これは桃太郎話の影響かもしれないが、参考にはなろう。なお「鱗形」では「十団子」となっているが、十団子は東海道宇津谷峠の名物で、京都の大仏餅（元禄十七年創業）、江戸の幾代餅（享保末創業）と比べられており、語り手の時点に立つての興味から持ち出したもので、桃太郎話本来のものではないであろう。

黍は『本朝食鑑』に、稲黍はうまくないのに対し、「糯黍者状與稻黍同、而粒大色赤而粘、作餅及団子而食味美為上饌」とある。団子はこの糯黍で作る。「赤本」に白で粉を挽いている絵があるが、黍粉にして団子に丸めたのであろう。しかし、団子は多く米の粉を用いる。十団子にしても更級団子にしちかりで、江戸時代の随筆類には、黍を団子に作るとはあっても「黍団子」の名では登場しない。太田南畝の『半日閑話』に、江戸で桃太郎にあやかつて黍団子を売り出した例があるのみである。桃太郎にあやかつたから売れたのであり、このことを逆に言え

ば、黍団子は一般的な食物ではなかったことを示している。「上饌」とは、主に田舎において神事等事ある時の供え物食の意であろう。黍そのものは、古代中国においては「孔子家語」に「夫黍者五穀之長也」と言われているほどに尊重されたものであるが、この話自身は黍が尊重されなくなったことへの孔子の古礼の尊重を語るものである。まして桃太郎話を支える人達がそこまで意識していたとは思われない。当時においては黍は米を作っても米を食べない農民の常食であり、粗食である。本来なら、わが子の門出の祝福し、その弁当とするには米の飯・団子を持たせるのが順当であろう。「鱗形」が十団子としたのもその考えに立つたものであろう。「三戸話」には「こつちの四人は日本一の黍団子をくつているので、何千人力にも強くなっている」とあるが、黍に靈力があつたとするのは後の付加であろう。黍そのものに予祝する靈力があつたという記述はそのほかのどこにも見当たらない。

要は、黍団子を「日本一」と呼ぶには違和感があるということである。しかもこの「日本一」は「赤本」のみではなく、「三戸話」「西津軽話」にも用いられている。「幼年」もその伝承をそのまま用いたものとみてよい。「日本一」は単なる褒め詞という以上に、伝承過程において、格別のこだわりがある。

「日本一」の最も古い用例は、既に指摘されているように『大鏡』の藤原佐理に対して「日本第一の御手のおぼえはこの、ちとり給へりし」で、その後も頻出するが、近世初期には「天下一」を称号を唱える職人・芸人が多かった（天和二年・一六八二禁止）。いずれにせよ最大級のほめ言葉である。これをたかが黍団子に用いている。予祝があるとすれば、むしろこの「日本一」にあるであろう。さらに団子にしたことにあるであろう。円い形は円満、充足等、縁起のよい形である。「上饌」としたのもその故であろう。これを「日本一」と称えることで予祝は成る。

黍団子はむしろ日常においても米の飯を食えず、米の飯を持たせる余裕のなかった農民の実情から出たと思われ、「日本一」はこれを殊更に子祝したものである。そういうように解すると、「日本一の黍団子」には、貧しくして我が子を送り出すせめてもの心やり、その親心がこもっていることに気づく。この言葉が後々までも流布したのは、単に教科書・唱歌等による桃太郎話や宣伝文句のためばかりではないであろう。それと明確に意識されずとも、この語感のうちに人々は貧しい親たちの子への思いを感じ取っていたに違いない。

しかし、考えてみると、もともと桃太郎が一人で鬼退治に出かけること自体無茶なことである。「赤本」では母は、桃太郎が始めて言い出したことだからと執り成しているが、少年英雄の性格があるとはいえず、その自信があつたのであろうか。一人で旅立つ桃太郎は、鬼退治というよりの、よく言えば武者修行の感が強い。柳田国男は、桃太郎が成年を迎えての求婚譚が欠けているとされている。旅立ちから真つすぐに鬼が島へ向かうことの不自然さは否めないのである。しかし求婚譚があつたという証拠はない。本来ならそうあるべきものが、ここでは欠けているというのであれば、そうした昔話の法則をあえて無視して鬼退治が構想されたとも言える。とすれば、その無理が否応なく桃太郎の旅立ちの姿に残つたといふべきであろう。「幼年」の「鬼が島をばうたんとて、勇んで家を出掛けたり」というのは、あまりに単純に過ぎて、この話の持つていたニュアンスを切り捨てている。鬼が島に向かう桃太郎の後ろ姿には、武者修行というより、一旗上げよう、一儲けしようといった当てもない旅に出る一匹狼の姿がちらついている。

また、桃太郎が鬼退治の出発に当って鬼を退治しなければならぬ理由も示されていない。この点は「鱗形」も「三戸話」「西津軽話」また教科書・唱歌も共通している。「三戸話」になると、爺は桃太郎の年の

至らぬことのみを心配しており、鬼の悪事には触れていない。触れなくても、鬼は悪事をなすという既成概念によつていふことでもあろうが、その事実は記されていない。「大江山」等による既成概念だけで退治されるのであれば、鬼もたまつたものではない。「昔噺」で桃太郎が「我皇神の皇化に従はず、却て此芦原の国に寇を為し、」と言ひ、爺も「鬼めを退治て禍を除き、皇国を安寧を計るがよい」と言つてゐるのは、明治政府の国策に添つた小波のさかしらである。これに対し、下剋上の戦乱期では善も悪も相対的なものでしかない。勝てば官軍、力あるものが世を制する時代である。「昔噺」のように、またNHKの大河ドラマの主人公が口にする「平和な世を実現するために戦う」などという、大東亜戦争中によく聞いたせりふのような、確とした目的も正義もあつて桃太郎は兵を起し、戦さをしたわけではない。明確な鬼退治の目的も示されていないまま桃太郎は鬼退治に出かけるのであり、それが話の簡略化であるとしたら、やはり肝心な話の要素を落としているといわねばならず、ここはもともとこういう形であつたとすれば、そこに戦国期の若者が一獲千金を夢見て旅立つ姿が反映しているとすべきであろう。

#### 四 家来になつた犬・雉子・猿

「赤本」の四丁表は「も、太郎鳴わたり」とあるように、出発した桃太郎が犬猿雉子を伴にする場面である。桃太郎が「なんじらともをせよ、いぬさるすいぶん随分なかよくましよ」と言うのに対し、猿は「日本一のきひたんひご、二三三十十くだされ、御とも申ませう」と答へ、それに対し、雉子は「さるとはよく深のふかひ、ひとつ下され、御とも申さん」と言ひ、犬は「さるをかわいがらしやるより、いぬをかわいがつて（欠字・団子）をひとつくだされ、御を思んほうじに御ともいたさん」と、三者三様の答え方をしているのがおもしろい。猿が欲の深いところを見せ、雉子は猿

を批判し、犬は殊更に桃太郎に取り入って家来の寵を争っている。主従の美德ときれいごとではすませていない点が注目される。

桃太郎が伴としたのは右の三匹であるが、動物を伴うことについても『西遊記』を始め例があり、これらの動物が敵(鬼)を倒すのに活躍することのできるものであることは、『燕石雜志』以来種々指摘されている。それなら他にもいるであろうに、なぜ犬・猿・雉子なのかということなら、引算するほかない。犬より狼が強いとは言えるが、狼は人間にも敵対する。雉子より鶯が強いとは言えても、人に馴れない。木に登ることのできる動物は他にもいるであろうが、猿ほどに活躍のできるものはいない。そのように消去していけば、この三匹が残るのは自然であろう。それではなぜ人間ではなく動物なのかということであれば、童話的昔話であると言うほかない。当然そこに擬人化がある。そこまで言うのが強すぎるなら、そこに人間の面影を見ておけばよいであろう。

しかし、いくら敵対心の強い動物とはいえ、これだけでどれほどの役に立つか、心もとない。殊に犬と猿とは「犬猿の仲」である。性格の違うお伴で、チームワークはとれるのであろうか。「赤本」では既に団子の数を争つてもいる。近代になると、「三戸話」「西津輕話」また教科書・唱歌等は皆「一つ」で、「昔噺」のみは桃太郎がけちって「半分」であるが、三匹を平等に扱っている点は同じである。「仲よくお供する」のである。この方が鬼を討つにはよいであろうが、では「赤本」はなぜに不協和音を出しているのであろうか。この三匹に擬人化を見るのであれば、黍団子を多く欲しがる猿、団子を差し置いて取り入ろうとする犬に、ちよつと羽振りをきかす武將に群がってくる野武士たち、或いは浪人たちの姿を見ることができよう。蜂須賀小六程度の男とそれに群がっている家来を想像すればよいであろう。

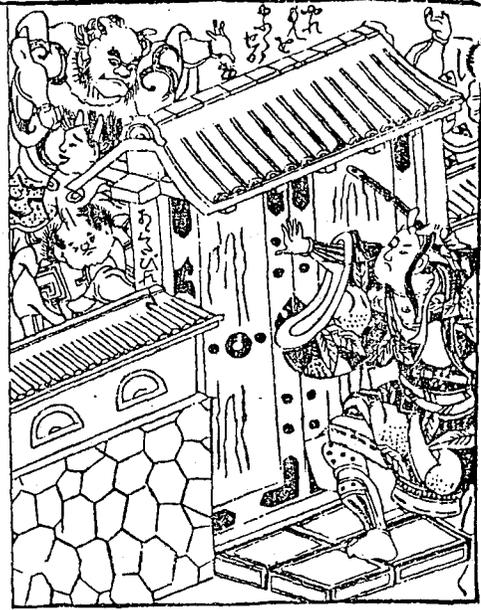
「赤本」の桃太郎と三匹の動物には、一獲千金を夢見て下剋上の世に

生きる戦国期の野武士の面影が窺える。団子を一つに統一するのは、後代のさかしらでしかない。「幼年」の「ナサケニツキクル」といった恩による主従の関係ではない。「赤本」の犬は御恩を報じようとは言っているが、団子との交換条件を前提としている。いわば契約の上に成り立つ主従関係である。黍団子一つで主従の恩を説くのは、江戸期以降の考え方であろう。「赤本」の三匹の態度には、主従として従いながらもおのれの立場を持っている姿が窺える。

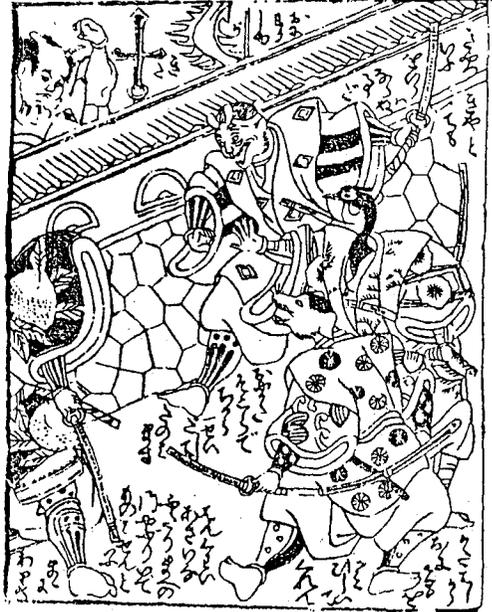
## 五 鬼からとつた宝物

「赤本」の四丁裏と五丁表は見開きで、鬼が島討ち入りの場面である。桃太郎が門を押しているのは門破りの体で、「はんくわいあさいな、ふたりまへの門やぶり、いでものみせんといふまゝにわり入」とある。猿大雉子ともに桃太郎の後ろに控え、雉子は「親方、そこらでちから一せ<sup>力</sup>いたてたのみます」と言い、犬は「かたはしからおにともをかみひしいでくれん」と言い、猿は「きやつきやといふても、をいらはならぬ事だ」と言っており、駆け登って内側から門を開いた形跡はない。鬼の側は門に鬼の家来が集まり「やれ、もんを<sup>門</sup>や<sup>破</sup>ふらせるな」「おにわか<sup>鬼</sup>しゆがきた」「あ、くたびれた」と言っている。

五丁裏は、鬼の親分が組みひしがれ、子どもが降参して宝物を並べている場面で、台の上に金銀の詰ったと思われる袋や打出の小槌、右上には反物がつんである。桃太郎が「たからはそれきりか、やい」と言う<sup>命</sup>と「いのちにはかへられぬ、みんなたせ<sup>出</sup>と親方の鬼が言い、「だからもの、のこらずさし上ます、おやかたを御身めん」と子分が親方の命乞い<sup>命</sup>をしている。「も、太郎、たから物を得て、本こくにかへる」で終わっている。この宝物を車に積んで「えんやらや」と曳いて帰るのは教科書・唱歌である。それで爺と婆が「一生安楽」に暮したのは「三戸話」であ



(5オ)



(四ウ)



(五ウ)

り、「いつまでもながく暮した」のは「西津軽話」である。

まず、鬼が島遠征が何に拠っているかについては、諸説『保元物語』古活字本の「為朝鬼が島に渡る事并びに最後の事」を上げる。「桃太郎島渡り」に対しては御伽草子の『御曹子鳴渡』があるが、義経が渡ったゑぞが鳴は鬼の鳴で、大王は「十六丈のせいにて、手足は八つ、角は三十」といった姿である。宝物については『保元物語』では「昔まさしく鬼神なりし時は、隠れ蓑・隠れ笠・浮び履・沈み履・刃などいふ宝」があったが、「今は果報つきて、宝もうせ、形も人になりて」とあるという。『御曹子鳴渡』にも「石の倉」があり、兵法の秘書を収めた金の箱がある。他に多くの宝物もあったと見てよい。鬼が宝物を蔵していることは認められるが、為朝は島人を征し、貢物を収めよといって帰り、義経も逃げ帰っており、二人とも宝物を欲しがってはいない。

鬼退治のあるのは『酒吞童子』で、桃太郎によって退治されるべき根

拠を提供するのはこの鬼である。しかし『酒吞童子』の鬼は京より若き美女を略奪しているが、宝物のことは記されていない。頼光・四天王は攫われた美女の救出が主目的であったと思われる。

右のように見ると、鬼は恐怖と邪悪の存在であったとばかりは言えない。御伽草子『一寸法師』の鬼のように、結果的には福をもたらす鬼もいる。不思議な能力を持ち、打出の小槌を持っている。鬼の王国はこちらから攻めていかなければ、独立国として存在し、『保元物語』の鬼が島のように自然消滅するものもある。『酒吞童子』を除いては、特に征伐される必要のない存在である。

「赤本」の桃太郎が親に申し出た時に「だんごもつておにがしまへまいたい」と言つて、鬼の邪悪とも退治しようとも言っていないことは先に指摘したが、それは語り手も鬼が邪悪であるとは始めから考えていないからではないか。鬼は邪悪な手段でなくても宝物の所有は可能である。とすれば、桃太郎は宝物を得ようとして鬼退治に出かけたのか、邪悪な鬼退治を目的として結果的に宝物が手に入ったのかと言えば、当然前者ということになる。鬼が簡単に宝物の提供にに応じてくれることはないのであるから、武力行使は必要なのであるが、鬼自身邪悪ではないとしたら、鬼の方は迷惑である。鬼は宝物を持つており、後にはそれは不正な手段で手に入れたものであるというように、邪悪の看板を付けられて征伐されたことになる。

宝物を得ることを主目的とするならば、爺と婆の立場からは、桃から生まれた異常出生の少年英雄が宝物を得て帰る物語は致富譚の性格を持つ。鬼にとつては迷惑でも、桃太郎の活躍は致富を夢見る人々によつてこの話は支えられていたのであろう。

しかし、この致富譚は単純ではない。「赤本」の桃太郎は鬼に向つて「だからそれきりか、やい」と欲の皮の張つたことを言つている。鬼

の方から宝物を出すことはあつても、桃太郎の方から宝物を皆出せと言ふのは「赤本」のみである。桃太郎にしては少々品のない言い方と思われる。言わずもがなのせりふではあろう。このあたりにも鬼退治の正義はさておき、宝物にばかり目の行つている桃太郎の姿がある。桃太郎には、やはりとれる時にはとつておくという野武士らしい姿が感じられる。今日流に言えば、略奪であり、侵略である。そういうところにも、戦国期の論理が感じられよう。

### むすび

「赤本」は子供向きの絵本であり、筋書もせりふも簡略で、これのみで論ずる危険性はあるが、やはり桃太郎話の古態を伝えたものと見てよい。その性格から見ると、桃太郎話は戦国期の面影が濃厚に窺われる。御伽草子等を基盤とはしていても、御伽草子ではない。宝物に打出の小槌や隠れ蓑等を入れるのは、後の語り手の御伽草子の修飾である。従つてその成立を言うなら、戦国末期か、その余波の残る江戸時代初期とするのがよいであろう。

また、桃太郎話の基本的性格は致富譚であり、貧しい農民が男子に託してよい暮しを夢見た物語である。しかも戦国期の下剋上の世であれば、それは現実性のないことではなかった。「日本一の黍団子」に親心も込めて、人の心をとらえ、流布したのであろう。ただ、『酒吞童子』等の鬼退治という趣向に拠つたため、どうしても略奪・侵略の趣が出たのはいたしかたないことであつたらうか。小波が過度にまで児童文学的修飾を加えたために、その趣は倍加された。明治以後は小学校唱歌・教科書は単純化して、「赤本」の持つ戦国期的なニュアンスを切り捨てたが、それでも小波の「昔譚」よりは罪がなかったであらう。いずれにしても、桃太郎話が今後生きていく意義は薄くなったと言わざるをえない。